

英国

東京藝術大学音楽学部 若手研究者等海外派遣事業

ルネサンスと現代の音楽 —文化交流の視点から

BRITISH RENAISSANCE MUSIC &
BRITISH CONTEMPORARY MUSIC
with Japanese Cultural Influences

2011年1月23日(日) 15:00 開演 (14:30 開場)

会場：東京藝術大学奏楽堂

foreword

お寒い中、本日はイギリス音楽の演奏会にお越しいただきまして、誠に有難うございます。

東京藝術大学音楽学部は、平成21年度から日本学術振興会による「若手研究者等海外派遣事業」の助成を受け、「英国芸術音楽の歴史と演奏に関する研究」を実施しています。今日の演奏会はこの事業に関連した企画で、第1部「英国ルネサンスの音楽」、第2部「日本の芸術・文化の影響を受けた英国現代の音楽」による構成です。

音楽学に代表される研究分野は我が音楽学部の大きな柱です。この度の英国音楽の研究は、再来年（2013年）生誕100年を迎えるベンジャミン・ブリテンについて考えることが一つのきっかけとなりました。英国では音楽を始めとする芸術を弛みなく創造すると共に、むしろ海外進出に伴う貿易や産業革命などによる資本力、国力でそれらを享楽する立場にあったと見做されます。またローマ帝国時代まで遡って大陸と島国という関係で眺めると、アジアと古代日本の状況に置き換えて、文化交流を考える術を見直すことにも考えたのです。最近では大学院リサーチセンター主導の効果もあり、音楽学ばかりでなく、実技系の大学院生による博士論文の優れた業績が増えていることも大きな力となっています。それら実技系の大学院生や教員の研究も加わって、例えば本日の演奏会第2部のテーマのように、イギリス音楽と日本音楽の接点にも着眼して、ブリテンのオペラ「カーリュヴァー」と、その創作に大きな影響を与えた能楽「隅田川」の二つの上演を来年、英国で果たしたいという大きな計画を、新年の初夢として温めているところです。

学部全体を縦断するプロジェクトを俯瞰しつつ、今日の演奏を楽しんでいただければ幸いです。今後とも音楽学部へのご高配、ご指導を賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

東京藝術大学音楽学部学部長
若手研究者等海外派遣事業運営委員会委員長

植田 克己

企画・制作：東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 西岡 龍彦

協力：独立行政法人 日本学術振興会、カンタベリー・クライストチャーチ大学

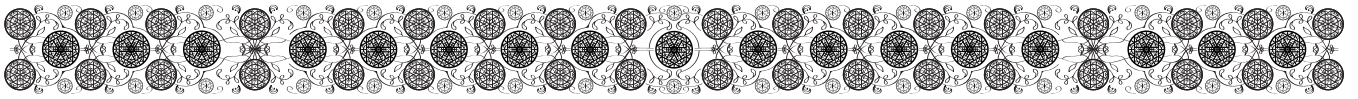
Shonorities、昭和音楽大学、(有)Mars A Sol (マルス エイ ソル)

第 I 部
英国 ルネサンスの音楽

- I. ジョン・ベディンガム John Bedyngham (1459/60 没)
《おお、麗しの薔薇よ *O rosa bella*》
歌／リコーダー／ヴィオラ・ダ・ガンバ
- 『ブクスハイム・オルガン曲集』より
《おお、麗しの薔薇よ *O rosa bella*》
オルガン
- II. アントニー・ホルボーン Antony Holborne (1545 頃~1602)
《パヴァーン *Pavane* と ガリアード *Galliard*》
リコーダー／ヴィオラ・ダ・ガンバ／リュート
チェンバロ／古典舞踏
- III. ウィリアム・バード William Byrd (1543 頃~1623)
《ウォルシングラム *Walsingham*》
チェンバロ
- IV. ウィリアム・バード William Byrd (1543 頃~1623)
《ファンタジア 第 13 番 *Fantasia XIII*》
オルガン
- V. ジョン・ダウランド John Dowland (1563~1626)
《流れよ、わが涙 *Flow, my tears*》
歌／リュート
- VI. イングランド民謡
《グリーンズリーヴス *Greensleeves*》
歌／リュート
- 作者不詳
《グリーンズリーヴスによるグラウンド
Greensleeves to a Ground》
リコーダー／ヴィオラ・ダ・ガンバ／リュート
チェンバロ／古典舞踏
- 歌：野々下 由香里／リコーダー：山岡 重治
ヴィオラ・ダ・ガンバ：福澤 宏／リュート：佐藤 亜紀子
オルガン：廣江 理枝／チェンバロ：大塚 直哉
古典舞踏：市瀬 陽子／粕谷 清佳
昭和音楽大学バレエコース有志／海田 一成／川上 愛以
田澤 里菜／三浦 絃子／三浦 紗也香／宮崎 美和子

第 II 部
英国 現代の音楽

- I. マイケル・フィニシー Michael Finnissy (1946~)
《火の見 *Hinomi*》
打楽器独奏
- II. バジル・アサナシアディス Basil Athanasiadis (1970~)
《7つのヴェールの踊り *Dance of the 7 Veils*》
打楽器
- III. ロデリック・ワトキンス Roderick Watkins (1964~)
《露の世 *Tsuyu no yo*》(新曲)
声／笙／二十絃琴／ヴァイオリン／ヴィオラ／チェロ
- IV. バジル・アサナシアディス Basil Athanasiadis (1970~)
《私の好きな雲 *Clouds that I like*》(新曲)
声／笙／二十絃琴／ヴァイオリン／ヴィオラ／チェロ
- 打楽器：藤本 隆文／林 瑞穂／牧野 美沙
- 声：東海林 史絵／笙：佐藤 尚美
二十絃琴：田村 法子／久本 桂子／ヴァイオリン：荒井 亮子
ヴィオラ：滝本 沙代／チェロ：久武 麻子



第 I 部

英国 ルネサンスの音楽

解説：遠藤衣穂

中 世後期から 15 世紀前半までの間、英国はヨーロッパ大陸との交流を通じて豊かな音楽文化を育ててきた。15 世紀後半はバラ戦争 (1455 ~ 85) による内紛のため文化的な鎖国状態に陥り、その交流が一時途絶えてしまう。しかし、自ら作曲を手がけるほどの音楽愛好家だったヘンリー 8 世 (在位 1509 ~ 47) の時代に大陸との交流が再開、エリザベス 1 世 (在位 1558 ~ 1603) の治世には、独自に発展してきた英国の伝統的手法と大陸の手法が融合し、英国芸術音楽は新たな繁栄の時代を向かえることになる。

Program Note

I. ジョン・ベディンガム John Bedyngam (1459/60 没)
《おお、麗しの薔薇よ O rosa bella》

ベディンガムは、15 世紀前半の英国を代表する作曲家の一人で、ヨーロッパ大陸と深い関わりを持っていたと推測されている。この作品は、最愛の女性を美しい薔薇にたとえ、切ない恋の苦しみを歌うイタリア語歌曲で、14 世紀にイタリアで流行したバラータという形式で書かれている。長い間、同時代のジョン・ダンスタブル (1453 没) の作品と考えられてきたが、近年の研究によりベディンガムの作品であることがほぼ確定した。当時としては異例の 18 もの楽譜史料により今日に伝えられており、編曲作品も残されていることから、多くの人々に愛された名曲であることがうかがわれる。本日は原曲に続き、1470 年頃にドイツで編纂された『ブクスハイム・オルガン曲集 *Das Buxheimer Orgelbuch*』に伝わる鍵盤用編曲をオルガン独奏で演奏する。

II. アントニー・ホルボーン Antony Holborne (1545 頃~1602)
《パヴァーン *Pavane* とガリアード *Galliard*》

ホルボーンの作品を 65 曲収めた大規模な曲集『パヴァーン、ガリアード、アルメイン、その他の短いエア集 *Pavans, Galliards, Almains, and Other Short Aeirs*』(ロンドン、1599) に伝わる合奏曲。16 世紀の英国では、大陸の舞曲が大流行していた。優雅にゆったりと歩むような 2 拍子のパヴァーンと軽やかで速い 3 拍子のガリアードは、当時もっとも流行した舞曲。このように性格の異なる舞曲を対にし、音楽に合わせて踊る習慣があった。エリザベス 1 世は、宮廷舞踏、とくにガリアードを得意としていたことで有名で、イタリアやフランスから流行舞踏をとりいれては舞踏会を開いて楽しんでた。本日は、パヴァーンとガリアードを踊りとともに楽しみ頂きたい。

III. 《ウォルシンガム *Walsingham*》

シェークスピア (1564 ~ 1616) の戯曲では、場面に応じて歌やリュート、舞曲などの音楽が挿入され、劇の進行に華を添えていた。《ウォルシンガム》は、悲劇『ハムレット *Hamlet*』(1600 頃) の第 4 幕第 5 場、オフィーリア狂乱の場面で歌われる。愛するハムレットが誤って自分の父親を殺してしまい、悲嘆のあまり狂ったオフィーリアが〈どうすれば本当の恋人が見分けられるの? How should I your true love know from another one?〉と歌う。旋律は英国の古い民謡に由来するもので、続いてお聴き頂くウィリアム・バードのチェンバロ変奏曲の主題としても用いられている。この変奏曲は、バードの鍵盤音楽を伝える最も古

い楽譜史料『ネヴェル夫人の曲集 *My Ladye Nevells Booke*』(1591)に収められている (no.31, *Have with yow to Walsingame*)。8小節からなる主題が22回にわたり変奏され、短い終結部で曲を閉じる。

IV. ウィリアム・バード William Byrd (1543 頃～1623)
《ファンタジア 第13番 *Fantasia XIII*》

バードは、英国王室礼拝堂の音楽家として活躍し、エリザベス1世の庇護のもとにさまざまなジャンルで数多くの傑作を生み出した。とくに鍵盤音楽の分野で果たした役割は大きく、英国最大の鍵盤音楽作曲家と呼ばれている。「ファンタジア」とは、高度な対位法技法による楽曲のことで、主題を模倣する対位法的な部分と自由な様式で書かれた部分が交互に現れることが多い。バードは、エリザベス王朝期の鍵盤音楽の分野において、ファンタジアをその頂点へと高めることに貢献した。《ファンタジア 第13番》は、フーガの手法を用いた初期の作品。厳格なフーガ的書法の後に自由な書法が続き、リズム交差や頻繁な拍子の変化、急速な楽句が生き生きと展開される。『フィッツウィリアム・ヴァージナル曲集 *Fitzwilliam Virginal Book*』(1609～19に筆写)とトマス・トムキンズ(1572頃～1656)により筆写された楽譜(1640頃～54, パリ国立図書館所蔵)により今日に伝えられている。

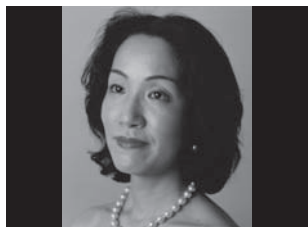
V. ジョン・ダウランド John Dowland (1563～1626)
《流れよ、わが涙 *Flow, my tears*》

ダウランドはリュートの名演奏家として知られており、数多くのリュート独奏曲やリュート伴奏付き歌曲を書いている。《流れよ、わが涙》は、リュートのための最も有名な作品《涙のパヴァーヌ *Lachrimae*》に基づく代表作で、『歌曲集第2巻 *The Second Booke of Songs or Ayres*』(ロンドン, 1600)に収められている。涙が頬を伝い落ちる様を、楽曲冒頭の下行する4つの音で見事に表現している。こ

の涙のモチーフは、歌の旋律だけでなくリュート伴奏の中にも形を変えて幾度となく現れる。哀愁を帯びた美しい旋律はヨーロッパ大陸でも広く親しまれ、複数の著述や楽譜史料に筆写されている。また、この旋律に基づき多くの作曲家が作品を書いており、その影響のほどがうかがわれる。後にダウランドは、原曲をヴァイオール合奏用に編曲し『ラクリメ、あるいは7つの涙 *Lachrimae, or Seven Tears*』(ロンドン, 1604)と題する曲集として出版している。

VI. 《グリーンズリーヴス *Greensleeves*》

英国の伝統的な民謡で、長調とも短調ともつかぬ不思議な陰影に満ちた名曲。長い間、口頭伝承により受け継がれてきたが、旋律を伝える最も古い史料は1605年頃に編纂されたリュートの写本楽譜(ダブリン、トリニティー・カレッジ所蔵)である。シェイクスピアの喜劇『ウィンザーの陽気な女房たち *The Merry Wives of Windsor*』(1602)のファルスタッフやフォード夫人の台詞にこの曲名が出てくることから、当時すでにこの歌がよく知られていたことがわかる。さまざまな編曲で親しまれているが、本日は原曲に続き『ディヴィジョン・フルート *The Division Flute*』(1706)に伝わるリコーダー変奏曲を演奏する。一定の旋律を反復するグラウンド・バス(通奏低音)の上で、リコーダーは旋律を自由に装飾しながら変奏していく。なお、《グリーンズリーヴス》には17～18世紀の振り付けによるカントリーダンスが残っているので、本日はこのグラウンドにあわせてそれを再現する。



歌：野々下 由香里

Soloist : Yukari Nonoshita

東京芸術大学声楽科卒業，同大学院修了。関西フランス音楽コンクール，第4回日仏声楽コンクールともに第1位入賞。パリ・エコール・ノルマル音楽院留学中ナント，トゥールーズ，リオ・デ・ジャネイロ等国際声楽コンクールに入賞。帰国後，中世から現代まで幅広いレパートリーで活躍。近年は『バッハ・コレギウム・ジャパン』のソリストとして，国内外の公演・録音に参加。バロックオペラ分野では，1995年「北とぴあ国際音楽祭」（寺神戸亮指揮）でのパーセル『ダイドーとエネアス』（第2の女）を皮切りに，ラモー『ピグマリオン』（彫像役），『エベの祭典』（エベ，イフィーズ，エグレ役），『イポリートとアリシ』（ディアース役）に出演し多くの聴衆を魅了した。日本フォーレ協会，コンセルルC会員。東京芸術大学古楽科准教授。



古典舞踏：市瀬 陽子

Classical dance : Yoko Ichise

立教大学，東京芸術大学卒。15～18世紀，ルネサンスからバロック，ロココに至るヨーロッパ宮廷舞踏，音楽劇・バレエ作品を中心に研究，舞台を制作・上演する。『優雅な宴 *les fêtes galantes*』（1992/93），シリーズ公演『ひとときの夢 *les songes agréables*』（1995-1999），『テルプシコーレ *Terpsichore*』（2000-2009）等を発表，ダンサー・振付家として活躍すると同時に，研究論文・雑誌寄稿等の執筆活動やダンスの普及・指導にも積極的に取り組む。聖徳大学准教授，東京芸術大学講師，昭和音楽大学バレエ研究所研究員，東京二期会特別講師。

古典舞踏：粕谷 清佳

Classical dance : Sayaka Kasuya

古典舞踏 Classical dance :

昭和音楽大学バレエコース1年生有志

海田 一成 Kaida Kazunari

川上 愛以 Kawakami Mei

田澤 里菜 Tazawa Rina

三浦 絃子 Miura Itoko

三浦 紗也香 Miura Sayaka

宮崎 美和 Miyazaki Miwako



リコーダー：山岡 重治

Recorder : Shigheharu Yamaoka

バーゼル・スコラ・カントールムにてリコーダーを H.M. リンデ及び J.v. ヴィンゲルデンに師事した。その後，オランダのハーグ王立音楽院にてリコーダーを R. カンジ，リコーダー製作を F. モーガンに師事した。1975年ベルギー，ブルーージュ国際音楽コンクールのアンサンブル部門第一位，1978年ミュンヘン国際音楽コンクールのリコーダー部門最高位入賞。帰国後は，リコーダーにおける演奏家，製作家，指導者として活動を続けている。マイスターミュージックよりマイスターミュージックより『フラウト・イタリアーノの魅力』MH-2063（レコード芸術特選盤）他多数がリリースされている。上野学園大学，東京芸術大学非常勤講師。



ヴィオラ・ダ・ガンバ：福澤 宏
Viola da gamba : Hiroshi Fukuzawa

オランダのデン・ハーグ王立音楽院をソリスト・ディプロマを得て卒業。ヴィオラ・ダ・ガンバをヴァーラント・クイケン、室内楽をシギスヴァルト・クイケン、バルトルド・クイケン、ルーシー・ファン・ダールの各師に師事。在学中より数々のアンサンブルのメンバーとしてヨーロッパ各地で活動。現在『バッハ・コレギウム・ジャパン』、『ザ・ロイヤル・コンソート』、『アンサンブル・エクレジア』メンバー。演奏家、講師として全国各地で多彩な活動を行っている。東京藝術大学古楽科、東海大学教養学部芸術学科非常勤講師。



リュート：佐藤 亜紀子
Lute : Akiko Sato

東京芸術大学音楽学部楽理科卒。左近径介氏と水戸茂雄氏にリュートの指導を受け、ドイツ国立ケルン音楽大学でコンラート・ユングヘーネル氏に師事し、2000年にソリスト・ディプロマ取得。スイスのバーゼル・スコラ・カントールムでホプキンソン・スミス氏に師事。ソロ活動のほか、歌手やアンサンブル、バロックオペラに出演など多彩な演奏活動を展開。アイゼナハ音楽院リュート講師。

<http://www.atelierlakko.com>



オルガン：廣江 理枝
Organ : Rie Hiroe

桐朋学園大学ピアノ科、東京芸術大学大学院オルガン科修士課程修了。DAAD (ドイツ学術交流会)、アサヒビール文化財団より奨学金を得て、ドイツ国立ハノーファー音楽大学オルガン科、シュトゥットガルト音楽大学オルガン科ソリスト課程卒業。オルガンを廣野嗣雄、ウルリヒ・ブレムシュテラー、ルドガー・ローマンの各氏に師事。ブルージュ、ライブツィヒ、シュバイヤー、ニュルンベルク、プラハなどの国際オルガンコンクールで上位入賞。デンマーク・オーデンセ、及び武蔵野市の両国際オルガンコンクールにてそれぞれ最高賞（1位なし2位）受賞。フランス・シャルトル大聖堂国際オルガンコンクールにてグラン・プリおよび聴衆賞の両方を得て優勝。以降、ドイツを拠点にコンサート・オルガニストとしてヨーロッパ各地、アメリカ合衆国、日本などで演奏し好評を博す。2006年より拠点を日本へ移し、後進の指導に携わりながら、演奏活動中。現在、東京芸術大学准教授、オルガン科主任。日本オルガニスト協会、日本オルガン研究会会員、ドイツ語福音教会オルガニスト。



チェンバロ：大塚 直哉
Harpsichord : Naoya Ohtsuka

東京芸術大学楽理科を経て、同大学院チェンバロ科を修了。またアムステルダム音楽院のチェンバロ科及びオルガン科を卒業。チェンバロ、オルガン、クラヴィコードの奏者としてソロ、アンサンブルの活動を活発に行うほか、これらの楽器にはじめて触れる人のためのワークショップを各地で行っている。ソロCD『トッカーレ〜触れる〜』ほか録音多数。またヘンデル『メサイア』、パーセル『ダイドー』などバロック期の声楽作品の指揮者としても活動を行っている。現在、東京芸術大学准教授、国立音楽大学非常勤講師。宮崎県立芸術劇場オルガン事業アドバイザー、旧奏楽堂事業アドバイザー。昨年4月からNHKFM『バロックの森』の案内役として出演中。

II. バジル・アサナシアデイス

《7つのヴェールの踊り》(新曲) 10'00"

《7つのヴェールの踊り》はタイトルの「7」が示すように、多種多彩なテクスチャと音色、光に呼応した動きでそれぞれ異なったヴェールを音楽的に表現している。

さらに解説を加えると、この作品は、短い各セクションで異なる雰囲気表現のために用いられる、7種のムーブメントと光を取り上げている。(それぞれは、静寂、ゆっくりした揺れ動き、規則的な揺れ動き、不規則な揺れ動き、鮮明な動き、光の透過、豊かな色彩、の7種類である。)これらは順不同に現れ、ときには流れるような持続性を生み出すために重ね合わされる。数字の7は、演奏する楽器の数にも呼応する。(2台のヴィブラフォン、2基のシンバル、3台のコンガ)美学的視点から見ると作品は、不規則性・沈静性・意外性・非発展性・非論理性といった日本の美学特有の要素を取り上げてきた一連の作品群に含まれる。

《7つのヴェールの踊り》は Canterbury Sounds New Festival の委託作品で、2010年5月にカンタベリーで初演がなされ、BBC3で放映(放送)された。

III. ロデリック・ワトキンス

《露の世》(新曲) 10'00"

露の世は露の世ながらさりながら
朝やけに染るでもなし露の玉
迎鐘落る露にも鳴にけり
身の上の露ともしらでさはぎけり
涼しさに忝さの夜露哉

この作品は俳句に着想を得て作られた一連の作品の一作品である。作曲家ワトキンスにとって、謎めきながら警句的な特性を持つ(or 謎めきながらもアフォリズムを含む)俳句は、非常に刺激的な魅力を持っている。複雑な絡み合い、ときに曖昧な含意や多義語の数々、高度に構造化

し抽出された形式的特性などに、現代音楽における真義を見出すのである。

この作品は小林一茶の有名な句、子の死を悼んで詠んだ「露の世は露の世 ながらさりながら」に影響を受けている。この句の内部構造とリズム、明らかな矛盾の包含、それに言及するまでもなく豊富な語義—それは自伝的な背景によってさらに高められている—など、この句は尽きることない魅力を放っている。なじみ深い言葉「露の世」に表される無常観の黙諾と「ながらさりながら」に含まれる悔恨の間に存在する緊張関係が、本作品における主要な動機となっている。

だが、上記の俳句の各語は《露の世 *tsuyu no yo*》にそのまま採用されているわけではなく、全曲を通して断片的に、示唆や言及の形で表れているに過ぎない。代わりにソプラノが歌うのは、一茶の「露」を扱った数え切れないほどの俳句の中の4句である。本作品において順次詠われるこの4句は、作品の全体像と方向性を決定づけ、また原典となった俳句の異なる側面を映し出している。

ワトキンスにとって、日本の伝統楽器である笙と琴の採用は初めての試みであり、非常に刺激的な経験となった。作曲技法上なじみのない制限が課されたことは、逆説的とはいえ、当然のことながら解放感を与えた。また彼は、特に触発されながらも結局のところ部外者としてしか接していなかった歴史的文化の奥深さを体感し、謙虚な気持ちを抱くことになった。ゆえに、この作品は一茶の素晴らしい芸術の様々な側面に触れようとし、また他の時代・文化に関する洞察を引き出そうとする、深い敬意の込められた試みなのである。

IV. バジル・アサナシアデイス

《私の好きな雲》(新曲) 15'00"

この作品は清少納言の『枕草子』からの引用を基にし、その随筆から受ける、簡素でありながら色鮮やかで流れるようなイメージを反映させたものである。

「しろき。むらさき。黒き雲あはれなり。風吹くをりの雨雲。明けはなるほどの黒き雲の、やうやう白うなりゆくもいとをか。月のいと明き面に薄き雲いとあはれなり。」



THE SECOND PART PROGRAM

BRITISH CONTEMPORARY MUSIC

Commentator : Basil Athanasiadis

THERE has been an increasing number of Western composers who, at least once, have used elements of Japanese culture as the main subject, or inspiration for their compositions. In some instances, these elements have become an organic part of their expressive resources through their consistent application on their works.

Analysis of such works has revealed a closely-knit relationship between the aesthetic/expressive vocabulary of the inspiration source and the original work. Although it is obvious that such a relationship can greatly vary between different compositions, undeniably the most prominent aesthetic principles of Japanese classical arts and music (e.g. asymmetry, ambiguity, simplicity, sobriety, fluidity, incorporation of noise) can also be observed in such compositions transferred from the source to the music work through a subjective process of inner osmosis.

The second part of today's program presenting the contemporary aspect of British music, demonstrates such example of works featuring the potential of Japanese aesthetics and culture for contemporary music composition.

Japanese cultural influences are manifested throughout the program through the references on Japanese-related subjects (i.e. haiku poetry, classical literature, bunraku). The presence of Japanese aesthetics is also prevalent, ranging from the ideas of spatial flexibility (*ma*) and irregularity (*fukinsei*)—originating from the Japanese architecture and space organisation—to the expressive subtlety and the non-rational organisation of ideas—usually encountered in Japanese poetry (*haiku*, *renga*).

The use of Japanese traditional instruments (*sho*, 20-stringed *koto*), introduces the Japanese sensitivity of virtuosity and beauty. Virtuosity is more associated with an inner state of serenity rather than the exuberance in a performance while beauty is more concerned with grace, elegance, detail in sound and presence, rather than expressive indulgence. The Japanese instruments, which due to their constructive peculiarities seem to perfectly encompass those concepts, offer a valuable source of information for the contemporary composer, on how to maximize the musical effect through limitation and how such limitation

can shift the composer's focus to the very fundamental questions on sound and its properties.

Often Japanese-influenced works created by non-Japanese artists have become a new source of inspiration not only for Western but also for Japanese artists. Such phenomenon of reciprocal cultural relationship is in essence the basis of creativity and cultivation of a diverse global cultural consciousness.

The preparation and presentation of this project has been made possible through the generous support of the organization JSPS (JSPS Post-Doctorate Fellowship Award 2010-11), the kind support of Tokyo Geijutsu Daigaku, the invaluable guidance of Professor Tatsuhiko Nishioka, the indispensable help of Professor Roderick Watkins, and all the performers involved who have diligently dedicated their time to prepare this program.

Program Note

I. Michael Finnissy
Hinomi (1979)

08'00"

Hinomi for solo percussion was written at the request of Nottingham University Music Department, for Elizabeth Davis, to whom it is dedicated. The title of the piece is taken from the Japanese *bunraku*—a play in which a bell positioned at the top of a fire warning tower is rung to warn the villagers of an impending attack by hostile outsiders.

The work is rich in references on Japanese aesthetics with a particular focus on the spatial flexibility (*ma*) and irregularity (*fukinsei*) achieved through the elastic temporal organisation (use of constant acceleranti and ritenuti) and the largely irregular rhythmic organisation employed throughout.

II. Basil Athanasiadis

Dance of the Seven Veils (2010) 10'00"

This work has as its theme the number 7, focusing on the ways that veils of different texture and colour, move and interact with light.

More precisely the work features seven types of movement and light attributes organised in short sections each featuring a different mood ('stillness,'slow swaying,'regular swaying,'irregular swaying,'vivid movement,'light through' and 'colourful'). These attributes are presented in an irregular order and often overlap to create a fluid continuity. The presence of number seven is also evident in the number of chosen instruments (2 vibraphones, 2 cymbals, 3 conga drums). Aesthetically, the work is part of a series of works featuring elements of Japanese aesthetics such as irregularity, quietness, unpredictability, non-development and absence of logical coherence.

Dance of the Seven Veils which was commissioned by the Canterbury Sounds New Festival was premiered in Canterbury in May 2010 and broadcasted by BBC3.

III. Roderick Watkins

Tsuyu no yo (new work) 10'00"

this world
is a dewdrop world
yes... but...

dawn's glow
hasn't quite yet dyed
the dewdrops

bell for the ancestors—
in falling dewdrops
it rings

unaware of life
passing like dewdrops...
they frolic

in this coolness—
grateful drops
of evening dew

This work is one of a number of pieces of mine inspired by traditional Japanese *haiku*. It is these poems' enigmatic

and epigrammatic qualities which have led me to find them so provocative as a composer: in their richly complex, sometimes obscure connotations and multiple meanings, as well as their highly structured, distilled, formal properties, they mirror those qualities that I most value in contemporary music.

This piece in particular is a response to Issa's famous poem, *tsuyu no yo wa tsuyu no yo nagara sari nagara*—written, we are told, upon the death of a child. This *haiku* is almost endlessly fascinating in its internal structures and rhythms, its employment of apparent contradiction, and, of course, the semantic richness of the words themselves (augmented by the autobiographical context). The tension between the implicit acceptance of the world's impermanence, as captured in the familiar phrase *tsuyu no yo*, and the deeply human regret captured in the "and yet" of *nagara sari nagara* is the principal motivation behind the piece.

The words of the above *haiku*, however, are never set in their entirety in *tsuyu no yo*, and are only pointed to, or referenced, in fragments distributed throughout the piece. Instead, the soprano is given just four of Issa's literally dozens of *haiku* on dewdrops (*tsuyu*) which in their chosen succession dictate the shape and direction of the piece, and reflect different aspects of the original *haiku*.

The use of traditional Japanese instruments, the *sho* and *koto*, is a new departure for me, and has been a most stimulating one. In imposing unfamiliar constraints upon my composition techniques they are, of course, paradoxically liberating; and in importing into my language the deep resonance of an historical culture that I am much inspired by, but from which I am necessarily an outsider, they are also humbling. This piece, then, is a respectful attempt to engage with various aspects of Issa's remarkable art, and to extract from it insights relevant to another time and another culture.

IV. Basil Athanasiadis

Clouds that I like (new work) 15'00"

This work is a setting of an excerpt taken from Sei Shonagon's classic *The Pillow Book*.

The music is a reflection on the simple yet colourful and fluid imagery portrayed in the text.

"I love white, purple, and black clouds, and rain clouds when they are driven by the wind. It is charming at dawn to see the dark clouds gradually turn white. It is moving to see a thin wisp of cloud across a very bright moon"



作曲家：マイケル・フィニシー

Composer : Michael Finnissy

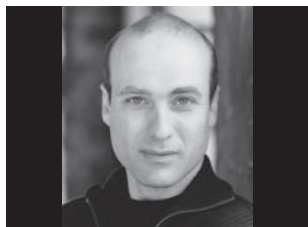
マイケル・フィニシーは1946年ロンドンに生まれた。英国王立音楽大学のFoundation 研究員として務める。同大学でバーナード・スティーンとハンフリー・Searleに作曲を、またエドウィン・Bebowとイアン・レイクにピアノを師事し、後にイタリアでRoman Vladの下で学んだ。彼の作品は世界中で上演され、またテレビ・ラジオで放送されている。またロンドン・コンテンポラリーダンス学校（単科大学）の音楽学部を創設し、作曲家としてロンドン・コンテンポラリー・ダンス・シアターやバレエ・ランバート（ランバート・ダンス・カンパニー）、Strider, Second Strideなどと共同制作を行っている。240を超える作品群にはオペラ、管弦楽曲、声楽曲、独奏曲、室内楽曲が含まれる。バース、ハダースフィールド、アルメイダ芸術祭で取り上げられ、作品は世界中で上演・放送されている。Verdi Transcriptions and Folklore (Metier Records), Red Earth (演奏：BBC 交響楽団、NMC recordings), Banumbirr (同：シドニー・アルファ・アンサンブル、ABC Classics), English Country Tunes (Finnissy 自演、Etcetera Records), Mars + Venus and other Ensemble works (演奏：IXION, NMC), 弦楽四重奏全集 (演奏：Kreutzer Quartet, Metier Records) などが録音されている。これらの録音は「現存する中で最も重要な作曲家の一人」(BBC ミュージック・マガジン, 1998年)、「イギリスで最も重要な前衛的アーティスト」(クラシック CD, 1998年) など批評家から多くの称賛を得た。



作曲家：ロデリック・ワトキンス

Composer : Roderick Watkins

ワトキンスはアメリカ（オバリン）で学部生として哲学と作曲を学んだ後、イギリスに帰国し英国王立音楽院の大学院課程に籍を置いた。在籍中、学内の主だった作曲賞を独占し、最終的には Leverhulme 教育助手奨学生として迎えられた。リチャード・ホフマン、ポール・パターソン、ハンス・ヴェルナー・ヘンツェなどに師事した。また、パリのフランス国立音響音楽研究所（IRCAM）の作曲・コンピューター・ミュージック研究室（Cursus de Composition et Informatique Musicale）で一年間研究に励み、これ以降アコースティック・電子双方の楽器を作曲に採り入れるようになっていく。エレクトロニクスに対する彼の最大の関心は音の合成にあり、後に作曲研究員（compositeur en recherche）として再び IRCAM に在籍し、物理モデル音源ソフトウェア Modalys の開発に携わった。作曲作品には、1997年ミュンヘンとロンドン（アルメイダ芸術祭）でマルクス・シュテンツ指揮のロンドン・シンフォニエッタにより初演された長編の室内楽オペラ『The Juniper Tree』が含まれる。他にエレクトロアコースティックによる作品は室内楽団とコンピューターによる『The Looking Glass』（IRCAM で制作）、バース音楽祭でのコンピューター・ミュージックのインスタレーション『Sound in Space』がある。また、イタリアのモンテプルチャーノ芸術祭から委託されて制作した長編マイム劇『Labirinto』でも、楽器とエレクトロニクスが組み合わされている。管弦楽曲の『Red Light』と『Who walked Between and Still』は、共にブリテン・シンフォニアのために書かれ、また同楽団によって初演された。また、『Light's Horizon』はアメリカのジョーンズ・ホプキンス大学交響楽団に委託された曲である。室内楽曲には『A Valediction』、『Of Weeping（ソプラノ・微分音リコーダー・ブリペアド・ピアノ）』、『Last Light（クラリネット・ピアノ）』、『At the Horizon（フルート・ピアノ）』などがある。現在は、カンタベリー・クライストチャーチ大学で音楽学部の学部長と作曲・現代音楽学の教授職を兼任する。また Sounds New Festival 芸術委員会の創設メンバーであり、カンタベリー音楽祭では定期的に若手作曲家による作品公演の音楽監督も務める。現在は、カンタベリー・クライストチャーチ大学で音楽学部の学部長と作曲・現代音楽学の教授職を兼任する。また Sounds New Festival 芸術委員会の創設メンバーであり、カンタベリー音楽祭では定期的に若手作曲家による作品公演の音楽監督も務める。



作曲家：バジル・アサナシアディス

Composer : Basil Athanasiadis

バジル・アサナシアディスはギリシア出身の作曲家である。トリニティ音楽院 (Trinity College of Music) の学士過程でダリル・ランスウィックに師事し、在学中にチャペル作曲賞を受賞。卒業後、G.V. ターナー・クック奨学生として英国王立音楽院の修士課程へ進み、ポール・パターソンに師事する。その後はロデリック・ワトキンスとポール・パターソンの指導の下、ジョナサン・ハーヴェイを主査に、カンタベリー・クライストチャーチ大学の博士課程で研究奨学生として研究を重ねた。作品は視覚的な性格が強く、ダンスや舞台と融合させた上演も多い。近年の作品では特に日本美の「侘・寂 (わび・さび)」に着目し、これは2004年以降の博士及び博士後研究の主要なテーマとなっている。作品はヨーロッパ、アメリカ、カナダ及びアジアで、London Sinfonietta, Amsterdam Loeki Stardust Quartet, Mondriaan Quartet, Silk String Quartet, Okeanos, Alea III, Shonorities などのアンサンブルや、BBC Singers, Wells Cathedral Choir, Cambridge Chapel Choir of Selwyn College, Montreal Christ Church Cathedral Choir などの合唱により上演されている。楽譜はオックスフォード大学出版、ユナイテッド・ミュージック出版から出版され、Organ and Choir, Dutton Epoch, Regent Records and Fonorum といったレコード会社から録音もリリースされている。加えて、現代音楽誌の Polytonon と雑誌 Jazz&Jazz (2009年11・12月号) に博士論文の概要が、ギリシア語で音楽学者 Thomas・Tamvakos により発表されている。その他に、英国音楽情報センター (BMIC) とギリシア作曲家協会に所属し、また音楽団体 Shonorities の創設者としての活動も行っている。2010年1月に来日し現在、日本学術振興会の2010-11年博士後研究奨学生として東京藝術大学に在籍し、西洋の楽器と日本の伝統楽器 (特に笙と二十絃箏) のための作品に精力的に取り組んでいる。



声：東海林 史絵

Voice : Shie Shoji

北海道出身。ダンス留学で渡英、ロンドンでドラマ、歌のレッスンを始める。トリニティー音楽大学にて声楽を専攻、後に Sir Geraint 奨学金を受けロイヤルウェルシュカレッジオブミュージック & ドラマにてミアム・ボウエン氏に師事。卒業後、コーラスとして National Reis Opera (オランダ)、Carl Rosa Opera (英国) のオペラ『Turandot』、『I due Foscari』、『Boris Godunov』、『Merry Widow』のヨーロッパツアーに出演、ミュージカルでは Cameron Mackintosh プロダクションによる『Miss Saigon』の英国ツアーに参加。現代音楽の分野では現在活躍している主に英国の作曲家、振付家と共に舞台演出した新作品の数々を日本とヨーロッパで公演。昨年11月、ヴァイオリンとのデュオでロンドンの Ekon 芸術音楽祭に出演、同プログラムで今年4月アテネにてコンサートを予定。



二十絃箏：田村 法子

20-stringed koto : Noriko Tamura

6歳より母に手ほどきをうける。1989年 正派邦楽会准師範登第。1994年 正派音楽院本科卒業時、総裁賞受賞、師範昇格。1995年 正派音楽院研究科卒業、NHK 邦楽技能者育成会卒業。仙台にて、母 (田村 雅楽徽) とジョイントリサイタル開催。1998年 日本音楽集団入団。年4回の定期演奏会、海外公演、地方公演、ラジオ、テレビへの出演、CD録音などの演奏活動に参加。この年より、吉村七重プロデュース『邦楽展』に現在に至るまで出演。新進作曲家との共同作業による新作などの演奏活動を行う。1999年 NHK 邦楽オーディション合格。2003年より、文化庁「本物の舞台芸術体験事業」ミュージカルオペラ『うたよみざろ』公演にて、二十絃箏を担当。2004年 第11回賢順記念全国箏曲祭コンクールにて、第1位 (賢順賞) 受賞。2005年 仙台にて母と、第2回ジョイントリサイタル開催。NHK 教育テレビ『芸能花舞台』に出演。(西村 朗 作曲 二十絃独奏曲「タクシム」を演奏) 2007年 NHK 大河ドラマ『篤姫』箏指導担当。2008年 第8回朝日現代音楽演奏コンクールにて、第3位受賞。2009年 2,6,10月台北での二十絃箏講習会講師を務める。現在、十三絃、三絃の古典曲より現代曲に至るまで、幅広く演奏活動を行う。正派邦楽会師範、正派合奏団、桐韻会に所属。日本三曲協会会員。日本音楽集団団員。昭和音楽大学非常勤講師。



二十絃箏：久本 桂子

20-stringed koto : Keiko Hisamoto

久本成子氏，二十絃箏を吉村七重氏に師事。国立音楽大学教育音楽学科卒業。NHK 邦楽技能者育成会修了。NHK 邦楽オーディション合格。ベトナム・タイ・インドネシアや韓国，ブラジルでの海外公演に参加。NHK-FM『邦楽のひととき』出演。他，デーモン小暮閣下のライブ出演，和太鼓や叙情歌との共演等，他ジャンルとのコラボレーションにも意欲的に取り組み，様々な活動を展開中。現在，玄箏社師範。玄箏社常盤会所属。日本音楽集団団員。お茶の水女子大学箏曲部講師。



笙：佐藤 尚美

Sho : Naomi Sato

1975年生まれ。東京芸術大学音楽学部器楽科サクソフォーン専攻卒業，アムステルダム音楽院大学院修了。東京芸術大学在学中に副科として笙を石川高氏に師事。1998年よりアムステルダムを拠点に活動を開始，2003年よりNieuw Ensemble/Atlas Ensemble(アムステルダム・オランダ)のレギュラーゲストメンバーとして，笙と西洋楽器の組み合わせた作品制作のためのワークショップ，制作公演，に深く携わってきた。2005年には，ハーバード大学，マサチューセッツ大学，ノースイースタン大学にて『日本伝統音楽の感覚からみる西洋現代音楽』のレクチャー・サイタルに招聘。2006年にはメルボルン大学にて，2009年にはカリフォルニア大学デヴィス校にて同様のレクチャーとマスタークラスを行った。今までに，Nieuw Ensemble, Ives Ensemble, Aurelia Saxophone Quartet, Nederland Vocaal Laboratorium, Dansgroep Kriszitna de Chatel (以上オランダ), Fontana Mix Ensemble (イタリア), East-West Festival Ensemble (ドイツ)などと共演，オランダ各地をはじめ，ドイツ，フランス，ルクセンブルグ，イタリア，スペイン，デンマーク，フィンランド，チェコ，アメリカ，オーストラリアにて日本をテーマにしたコンサートを企画開催してきた。



ヴァイオリン：荒井 亮子

Violin : Ryoko Arai

武蔵野音楽高校を卒業後，奨学金を得て渡米。ハートフォード大学ハート音楽院卒業後，ニューヨーク州立ストーニーブルック大学にてアニー・カヴァフィアンのもと修士課程，博士課程修了。在学中エマーソン弦楽四重奏団などと共演。PMF, クフモ国際音楽祭，イエローバーン音楽祭などに参加し，オーケストラや室内楽の研鑽を積む。2004年よりグラシアー・トリオのヴァイオリニストとして日本，アメリカ，台湾で演奏活動を行う。現在，仁愛女子高等学校音楽科特別講師。



ヴィオラ：滝本 沙代

Viola : Sayo Takimoto

東京音楽大学卒業，同大学大学院修了。在学中に特待生奨学金を得て，また定期室内楽演奏会のソリストに選ばれ久保陽子氏，兎東俊之氏と共演。2006年度札幌新人音楽会に出演，併せて奨励賞を受賞。2008, 2009年 PMF に参加。2010年第153回日演連推薦 新人演奏会にて札幌交響楽団と共演。ヴィオラを兎東俊之，百武由紀，室内楽を浦川宜也，齋藤真知亜の各氏に師事。現在オーケストラや室内楽，レコーディング等を中心に活動。



チェロ：久武 麻子

Cello : Asako Hisatake

桐朋女子高等学校音楽科及び桐朋学園大学音楽学部卒業後、同大学同学部研究科を経て渡仏しフランス国立ボルドー音楽院研究科を一等賞で終了、同時に奨励賞を受賞する。2003年夏に帰国後は、日本を中心に演奏活動を始める。今までに佐藤明、故井上頼豊、荻田雅治、エチエンヌ・ペクラー各氏に師事。現在昭和音楽大学合奏講師。



打楽器：藤本隆文

Percussion : Fujimoto Takafumi

東京音楽大学卒業。東京芸術大学音楽学部准教授。元神奈川フィルハーモニー管弦楽団首席ティンパニ奏者。打楽器四重奏団『SHUN-KA-SHU-TOH』並びに『マリンバアンサンブル quint』の代表。オーケストラや現代音楽の分野における活動・大学での教育研究活動の傍ら2003年よりピアニスト・高田ひろ子とのデュオによるライブ活動を開始。ジャズをベースにしたヴァイブラホンによる即興演奏にも意欲的に取り組む。



打楽器：林 瑞穂

Percussion : Mizuho Hayashi

2008年東京芸術大学音楽学部器楽科打楽器専攻卒業。在学中、オーディションに合格、第33回、34回芸大室内楽定期演奏会に打楽器アンサンブルで出演。また、2008年ソリストとして打楽器コンチェルトを芸大フィルハーモニア、2010年に東京交響楽団と協演。2008年アルガリズムプロジェクト参加。2009年八ヶ岳北杜国際音楽祭出演。これまでに、岩下香緒里、有賀誠門、藤本隆文、竹内将也の各氏に師事。現在、オーケストラ、現代音楽、室内楽、ポップスなどジャンルを問わず様々なコンサートに出演。パーカッションユニット【HARROMI-YAH!!!】（ハロミーヤ）、現代音楽を中心に活動する打楽器 Duo『東雲打楽器二重奏』メンバー。



打楽器：牧野 美沙

Percussion : Missa Makino

幼少の頃よりバレエ、ピアノ、エレクトーンを習い、中学校の吹奏楽部で打楽器を始める。神奈川県立神奈川総合高等学校個性化コース卒業。東京芸術大学音楽学部器楽科打楽器専攻卒業。在学中にモーニングコンサートのソリストとして藝大フィルハーモニー管弦楽団と共演。これまでにマリンバ及び打楽器を藤本隆文、岡田真理子、今井忠子の各氏に、室内楽を藤本隆文、寺本義明、有森博の各氏に師事。現在同大学院修士課程1年に在籍し、オーケストラ、吹奏楽、室内楽、ソロ等様々な分野で活動の場を広げつつある。マリンバアンサンブル『quint』メンバー。